

79/2

国内経済情勢

概観

主要業界の在庫調整を映じて、6月の鉱工業生産、出荷は生産財を中心にかなりの落込みを示した。商品市況も、こうした背景に加え、天候不順による末端需要の伸び悩みなどもあって、軟弱地合いが続いている。しかし、個人消費が持直し基調にあるほか、機械受注、建設工事受注等設備投資の先行指標は、このところ増加傾向を示している。

金融面では、マネー・サプライが引き続き低い伸びにとどまっているほか、金融市場の繁忙を映じてコール・レート等市場金利は一段高となった。この間、企業の資金繰りは、先行き警戒感の高まりもあって繁忙の度合いを強めている。

6月の国際収支は資本収支の流出超増を主因に大幅赤字となったが、貿易収支は6ヵ月ぶりに黒字となり、改善傾向を示している。

機械受注は増加傾向

6月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は、前月比2.5%の減少となった。これは、多くの業界で在庫調整が行われていることを背景とするもので、財別にみると、各財とも減少したが、中でも従来比較的小幅の減少にとどまっていた生産財の大幅減が目だった。

鉱工業出荷(季節調整済み、速報)も2ヵ月増加のあと、6月は前月比-2.9%と減少した。これ

には、前月著増の反動(耐久消費財、一般資本財)や、長雨による建設工事進捗難を映じた減少(建設資材)も響いているが、生産財が需要先の生産調整を背景にかなりの減少となったことが大きな要因となっている。

6月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は前月比+3.9%と引き続きかなりの増加となり、生産者製品在庫率指数(同)も117.8と前回景気調整期のピーク(46年10月、118.7)に近い高さとなった。もっとも、製品在庫の増勢は生産調整の広がり映じてこのところ鈍化ぎみとなっている。

6月の設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は前月著増のあと前月比-1.7%と減少したが、ならしてみれば公害防止関連機器、鉄鋼用ロール等を中心に増加している。機械受注(船舶を除く民需、季節調整済み)は鉄鋼、化学等製造業の著増を主因に前月比+9.6%と3ヵ月連続の増加となり、7~9月にも引き続きかなりの増加が予想されている。また、建設工事受注額民間産業分(同)も前月比+10.7%と増加した。引き続き既往引合い分の成約が主体であるが、新規工事の引合いもこのところ若干増加傾向にあるよううかがわれる。

6月の全国百貨店売上高は、衣料品、食料品等の好伸を主因に前年同月比+28.3%(前月同+22.3%)と引き続き回復傾向を示した。また、7月の乗用車(軽自動車を除く)新車登録台数も、前年同月比-19.7%(前月同-27.8%)と落込み幅は引き続き縮小し、大衆車を中心に売れ行きは回復さ

みとなっている。

6月の労働関連指標をみると、有効求人倍率(季節調整済み)は1.25(前月1.36)と製造業を中心とした求人手控えを映じてかなり低下した。また、所定外労働時間(同)も製造業における生産調整の広範化を映じて前月比-3.0%と一段と減少した(前年同月比では-19.5%)。一方、夏季賞与支給額は、前年比+47.0%(労働省調べ、対象22業種276社)と空前の伸びとなり、こうした事情を背景に名目賃金は前年同月比+30.3%と高水準の伸びを続け、実質賃金も前月に引き続き前年を上回った。

卸売物価はかなりの上昇

7月の商品市況をみると、価格凍結品目のうち値上げが認可された砂糖、セメント、アルミは上昇し、非鉄金属も月央以降下げ渋りないし小反発となったが、鉄鋼が流通段階における仮需はく落を主因に訂正安を続けたほか、合繊、石油製品、合成樹脂、紙等がおおむね軟調に推移した。さらに前月末に小反発した天然繊維も再び軟化するなど、総じてみれば軟弱地合いを持続した。これは、主要業界の減産と流通在庫調整が引き続き進捗していることが主因とみられるが、加えて長雨の影響による末端需要減(セメント、ガソリン、繊維)、ひところみられた政策の早期転換期待がはずれたことによる流通筋の失望売り(鉄鋼、繊維)や輸出の一部にみられる成約不調の動き(棒鋼、合繊)なども響いている。

卸売物価は、6月に前月比+1.3%と電力料金的大幅引上げもあってやや騰勢を強めたあと、7月は、非鉄金属、繊維製品が統落の反面、鉄鋼が高炉メーカーの大口契約分鋼材値上げから大幅に上昇し、石油・石炭・同製品(原油、コークス)等も統騰したため、前月比+1.1%と上昇を続けた

(前年同月比+34.2%)。

7月の消費者物価(東京、速報)は、季節商品が長雨に影響された野菜等の値上がりから高騰したため、前月比+2.2%(前年同月比+23.4%)の大幅上昇となった。季節商品を除く総合でも、衣料は値下がりしたもの、雑費が新聞代の値上げからかなり上昇したため、前月比+1.2%(前年同月比+21.8%)と根強い騰勢を持続した。

市場金利の上昇続く

7月の金融市場をみると、銀行券は前月末休日に伴う月初の還収増を主因に510億円の還収超(前年922億円の発行超)となり、また、財政資金も税収増の一方、米の予約概算金の支払い、公社の給与追払い等がかさんだため、3,768億円の揚超と前年(同11,464億円)を下回った。このため、月中資金不足額は3,892億円と前年(同13,039億円)を大きく下回り、日本銀行は主として債券と手形の買オペレーションでこれを調整した。

この間、コール市場の需給は引き続き繁忙裡に推移し、コール・レートは民間給与支払いを控えた24日に0.5%上昇した後、税揚げがかさんだ8月2日にさらに0.5%の上昇をみた(無条件物出し手レート13.5%)。また、手形売買市場では、都市銀行筋の売り意欲が引き続き強かったため出合いは依然窮屈裡に推移し、手形売買レートは24日に0.5%上昇した(買い手レート13.75%)。

7月の銀行券平均発行高は、前年同月比+22.0%と前月並みの比較的高い伸びを続けた。6月の広義マネー・サプライ(定期性預金を含む)は、前年同月比+11.3%とほぼ前月(同+11.7%)並みの伸びとなった。

6月の全国銀行貸出増加額は、前年同月比+3.8%と前年を若干上回ったが、これは、6月末休日

の影響によるほか、各金融機関が4～6月の貸出枠を季節需資の増高する6月に重点的に配分したことによる面が大きく、4～6月通計では前年同期比-23.4%にとどまっている。中小企業金融機関の貸出増加額も、中小企業筋における設備投資手控え、在庫圧縮等の動きを背景に、実勢でみると引き続き前年同月を下回っている。

この間、企業の資金繰りをみると、企業によって差はあるが決算・賞与資金の流出後手元流動性は低下し、先行き警戒感も加わって、総じて繁忙の度合いを強めている。

6月の全国銀行貸出約定平均金利は、月中0.026%の小幅上昇(前月0.043%の上昇)と騰勢は一段と鈍化した。

7月の公社債市況は、前月みられた外人買いが細ったことや、金融緩和期待の後退に伴い、中旬以降小反落した。また、株式市況は参議院選挙後13日には旧ダウ平均で4,436円まで下押しした後もみ合い商状となり、8月に入って急落した。

貿易収支半年ぶりに黒字回復

6月の国際収支は、1,277百万ドルの大幅赤字となった(前月赤字1,002百万ドル)。これは、長期資本収支の流出超額が石油関係の大口对外投资や対日株式投資の大幅引揚超などで急増をみたほか、貿易外収支の赤字も為銀の対外短期借入利子の支払増加などから大幅に拡大し、さらに短期資本収支も多額の流出超となったためである。この間、貿易収支は、輸出の伸長、輸入の増勢鈍化から昨年12月以来半年ぶりに黒字を回復し、季節調整後の貿易収支じりは185百万ドルの黒字と前月(赤字39百万ドル)に比しさらに好転をみた。

6月の輸出を通関ベースでみると、前年同月比+62.2%と高水準の伸びを続けた。輸出価格は織

維等一部に騰勢鈍化をみたものもあるが、海外需要のおう盛な鉄鋼、化学製品等を中心になおかなり上昇しており、輸出数量も鉄鋼、自動車、繊維等を中心に増加を続けた。地域別にみると、米国内向けの増勢が著しいほか、中近東、中南米向けも好伸したが、反面、西歐向けおよび東南アジア向けはやや頭打ち気配となった。

なお、7月の輸出信用状接受高(季節調整済み)は、鉄鋼、自動車、化学製品を中心に前月比+7.9%とかなりの増加となった。

6月の輸入(通関ベース)は、前年同月比+63.9%(前月同+83.7%)とかなり伸びが落ち込んだ。輸入価格は、繊維原料、非鉄金属鉱、一部食料品等の下落に加え、原油価格の微落もあって、上昇は小幅にとどまった。また、輸入数量は、原油のほか食料品、繊維原料、銅鉱石等が軒並み落ち込んでいるため、2年ぶりに前年水準を割り込んだ。

7月の外国為替市場をみると、高価格原油を中心に輸入決済需資が高水準となったため、外貨需給はひっ迫ぎみに推移した。このためインターバンク米ドル直物中心相場は月初から上げ歩調をたどり、中旬にいったん軟化したものの、月末から8月初にかけて再び急騰した(7月末297円80銭、8月7日301円50銭)。また、先物相場もおおむね直物相場に追随した動きを示しつつ、月中かなりの上昇をみた(3ヵ月先物ディスカウント幅、月末1.75%)。

7月の外貨準備高は月中225百万ドル減と6ヵ月ぶりに減少し、月末残高13,204百万ドルとなった。

(昭和49年8月13日)